

学校名	広島学院	2025年度、創立70年を迎える中、「新校舎建替プロジェクト」を本格始動。12月に無事着工を迎え、節目の一年となりました。教育面では、Cura Personalisを軸に生徒へ寄り添う指導を継続し、豊かな人間形成と確かな進学実績の両立を図りました。また、持続可能な学校運営に向け、教職員の働き方改革や業務精選に踏み込むとともに、物価高騰等に備えた授業料改定を実施し、保護者の理解を得ることができました。今後も「FORWARD AGAIN」を合言葉に、法人と連携しながら広島におけるイエズス会学校として、その使命と責任を果たしてまいります。
-----	------	---

中長期計画				アクションプラン(AP)				事業計画		2025年度事業計画およびアクションプラン 実施状況コメント
基本方針	区分	No.	大項目	No.	中項目	No.	4校共通AP	2025年度		
I イエズ会学校であり続ける II 地域社会に魅力的な学校であり続ける III 教育環境／組織人員体制を整える	4校共通課題	1.	イエズス会学校の10の識別子に沿って、学校運営を行う	(1)	カトリックであること	C-AP 1	意思決定を行うプロセス(共同識別)に健全に参与する雰囲気を作ること	各会議を通じた意思疎通の強化	毎日始業の打ち合わせの前に全教職員で眼目を実施。折り、識別の雰囲気を大切にすることができた。	
							C-AP 2	キリスト教的価値観、普遍的価値を知り、コミットすることができる倫理・宗教教育を実践する	イグナチオ的教授法に基づいたイエズス会教育、特に「内省」の実践	
					(2)	安全で健康的な環境をつくる	C-AP 3	ハラスメントのない学校環境をつくる	職員研修におけるハラスメントに関する研修の実施	定期的な環境点検、面接・面談を大切にできた。
							C-AP 4	教職員の働き方を検討する	体罰、いじめ、ハラスメントに関するアンケートの実施	
							C-AP 5	Cura Personalisを徹底する	カウンセリングドクター・学校カウンセラー、学習支援室(room-w)、保健室等との連携によるカウンセリングの推進	
					(3)	Global市民の育成	C-AP 6	生徒がGlobalizationの意味や問題点を学ぶことができるカリキュラムを構築する	フィリピン(8月)・カンボジア(12月)・アメリカ(3月)の国際交流プログラムの実施	従来のフィリピン研修、カンボジア研修、カリフォルニア研修に加え、エコロジーと移民、歴史をテーマにした「ハワイ研修」を検討・実現化に動くことができた。
							C-AP 7	生徒が世界のGlobal化を体験する機会を設ける	英語の授業における文化の違いに関する意識醸成	
							C-AP 8	生徒の英会話能力を向上させる	スプリット授業の充実	
							C-AP 9	多くの社会問題がGlobalなものであることを理解し、解決する策を考える機会を設ける	中3ILにおける世界の貧困や差別、紛争と難民などの問題について学ぶ機会の設定	
					(4)	被造物に対する配慮	C-AP 10	地球環境の問題を深く学ぶカリキュラムを構築する	IL、教科の内容から地球環境や環境保全の問題に係る考察の実践	各活動で時折行われる裏山での活動では、大いなるものの存在を感じながら、エコジカルな視座を養うことができた。
					C-AP 11	地球環境保全のために実践できることを行う	美化委員会活動の充実			
			(5)	正義の促進	C-AP 12	"For Others, With Others"の真の意味を学ぶ機会を設ける	中1ILにおけるイエズス会のミッションに関する学びの実施	上磯町公園での炊き出し活動、地域での学習支援活動など、社会正義にかかわる奉仕活動を積極的に展開することができた。		
					C-AP 13	"Others"とされる人々と直接触れ合う機会を設ける	中2ILにおける障がい者の立場や支援方法についての体験的な学びの実施			
					C-AP 14	"Others"と呼ばれる人々がなぜ生まれるのかを深く学び、"Others"の問題を解決するためにどんな方策があるかを考える場を設ける	中3ILにおける世界の貧困や紛争などで困っている人々についての学びの実施			
							中学3年生の街頭募金への参画			
							高校生によるフィリピン・カンボジアとの国際交流の実施			
							被災地や釜ヶ崎、児童養護施設などにおけるボランティア活動への参加と奉仕精神の実践			
							生徒活動と連携した地域ボランティア活動の推進			
			(6)	全ての人がアクセス出来る	C-AP 15	学校納付金の適正なあり方を検討する	経済的困難度の高い生徒に向けた奨学金の充実	シュワイツェル奨学金の存在を多くの在校生と保護者に周知できた。		
					C-AP 16	奨学金を充実させる	シュワイツェル奨学金の周知と活用			
					C-AP 17	近隣の人々に開かれた学校とするための方策を考える	広報部におけるSNSを活用した学校情報の発信			
			(7)	文化相互性	C-AP 18	自国の文化を深く学び、世界の多様な文化を知る機会を設ける	歴史・古典の授業における自国文化に関する理解の深化	フィリピン、アメリカの姉妹校との交流により、お互いの文化の理解に務めることができた。		
							行事の準備授業における自国および国際理解の深化			
			(8)	Globalネットワークに結ばれる	C-AP 19	イエズス会学校の"Educate Magis"を積極的に活用し、また、その活動に参加する	フィリピン(8月)・カンボジア(12月)・アメリカ(3月)の国際交流プログラムの実施	姉妹校との交流プログラムに加えて、各種国際交流オンラインプログラムに積極的に生徒は参加することが出来た。		
					C-AP 20	イエズス会学校関係以外にも、適切な教育機関などとのNetworkに積極的に繋がる	国際交流を行う学校との相互留学の際の発表や交歓会を通じた交流実施			
			(9)	人間としての卓越性を追求する	C-AP 21	"4つのC"を身につけることができる6年間の教育プログラムをつくる	ILプログラムの充実	各学年、精力的にILPに取り組むことができた。		
			(10)	生涯学び続ける	C-AP 22	卒業後も学校と関わりを持ち続けることができる組織をつくる	文化祭ホームカミングデーの活用	親友会と連携しながら、現在の学びが未来にどのようなつながっていくのかを示すことができた。また、これにより卒業生たちも現役生の姿からさらなる成長の機会を得ることが出来た。		
					C-AP 23	同窓会、同期会などを通して、学校で学んだことを振り返り、分かち合う機会を設ける	親友会(同窓会組織)との連携			
					C-AP 24	日本のみならず世界のイエズス会同窓会組織と結びつきを持ち、イエズス会教育に関する情報を共有できるようにする				
			2.	イエズス会教育を継承する、担い手を養成する	(1)	イエズス会教育を継承する担い手を養成するための機会提供、資料収集、研修会などを企画・実施する	C-AP 25	イエズス会教育について、少なくとも一人の教職員に専門的に学ぶ機会を提供する	JSEC委員による活動やJSEC研修の活用	JSECによる研修に中堅教員を派遣したほか、本校独自の「フロンティア研修」を釜ヶ崎・鶴橋で実施。
							C-AP 26	カトリック・イエズス会センターと協力して、イエズス会教育を学ぶ資料を豊かにし、随時研修できる機会を設ける	カトリックイエズス会センターとの情報交換、連携	
							C-AP 27	イエズス会中等教育推進委員会(JSEC)が中心となって、研修会を継続的に開催する	若手教員フロンティア研修(ボランティア・社会正義活動の視察)の活用	
								司祭、イエズス会員による研修への参加		
								国際交流、イエズス会教育部と連携した引率教員の研修		
								各種テーマ別教員研修への参加		
			3.	上智大学との繋がりを維持する	(1)	イエズス会学校で学ぶ生徒が"Ignatian Leadership"を身につけることができる機会を、上智大学が持つresourcesを積極的に活用できるようにする	C-AP 28	さまざまな学部と連携して、生徒が在学中に専門的な知識を学ぶことができる機会を設ける	必要に応じた上智大学教員・学生団体との連携	学生職員がSDGsに関するプロジェクトに積極的に参加することができた。
							C-AP 29	アジア人材養成研究センターなどの大学内の研究機関と連携して、世界のさまざまな課題を学び、体験できる機会を設ける	IL、教科、いのかの教育等、カリキュラム内容に応じた協力依頼	
								行事等を通じた留学生との交流による、互いの理解を基本とした学びの場の創出		
	学校別課題	4.	生徒の進路志望を実現させる学校になる(生徒の学力向上に常に努める/ men for othersの理解に導く)					カリキュラム表の提出による授業内容の精査と検討	生徒も教員も進路実現には心を込めて取り組んだが、本年度の大学入試の結果は、厳しい結果となった。原因をしっかりと分析し、次年度につなげたい。	
								各教科における生徒間の学力格差に応じた教科指導のあり方の検討		
								ICT教育に関する情報の発信		
				5.	生き生きと過ごせる学校になる(様々な挑戦の機会を作る)				生徒指導部を中心とした部活動に関する情報収集	それぞれのタレントへの気づきを大切にできた。
								各部署からの情報発信		
			6.	1人1人が「ここを居てもいい」という実感の持てる学校になる(生徒1人1人の持つ特性や環境に可能な限り配慮する)				教育相談係と学年の情報交換および連携の実践	一人一人をかけがえのない存在として認識することができた。	
							生徒面談、観察に基づいた関係教職員間の情報交換			
			7.	ICTを有効に活用する(ICT委員会を中心に、課題を検討し、有効活用を推進する)				ILや探求学習の際の活用、プレゼンの活性化	タブレット利用による授業の効率化、活性化をさらに推し進めることができた。	
							AI活用の可能性についての研究			
			8.	施設設備の経年劣化への対応を推進する				建築委員会を中心とした新校舎建設の推進	新校舎建設を現実に合わせてながら、実現することができた。	